奈文研ニュース
No.77 June 2020
NABUNKEN NEWS
独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2-9-1
https://www.nabunken.go.jp

奈文研の平城宮跡での継続的な活動が小学校社会科の副読本に

2017年度に公示された小学校の新学習指導要領が、本年４月から全面実施となりました。それにともない、奈良県内の小学校で広く活用されている社会科の副読本『奈良県のくらし』が改訂され、平城宮跡の保存・調査・活用に関する内容が大きく取り上げられることとなりました。長年にわたる奈文研の事業が、教育現場に還元される貴重な機会であるといえます。

『奈良県のくらし』は、県内の主に小学校３・４年生を対象として、その内容は、産業や自然、くらし、災害、伝統、文化財と多岐にわたります。新学習指導要領の４年生の学習項目には、県内の伝統・文化、先人の業績をもとに、地域の「モノ（文化財、自然）」や「コト（祭り、伝統文化、産業）」がいかにして継承されてきたのか、児童がその来歴を調べ、先人の苦労や努力について理解を深めることが目標として掲げられています。そして今回、その対象に選ばれたのが、長年の保存運動・調査・活用の蓄積を有する平城宮跡であり、その取り扱いは、従来の２頁から12頁に増えました。

過去の保存運動に関する頁では、棚田嘉十郎らの活動に加え、その後の土地の国有化、史跡指定、東張り出し部の発見による国道24号線バイパスの迂回等、様々な経緯を辿って平城宮跡が守られてきた歴史について、今回新たに紹介しています。こうした地道な調査の成果が史跡保存の進展に直結した事例を知ってもらうことは、文化財への理解につながるといえるでしょう。「なぜ発掘調査をするのか」、それにより「何がわかるのか」、「わかったことはどのように活かされているのか」。それらをふまえ、奈文研の継続的な発掘調査や研究、復原建物や展示施設での解説ボランティアの活動等、現在の平城宮跡での取り組みについてわかりやすく触れています。平城宮跡が多様な機関によって調査・研究・維持・管理・運営され、また解説ボランティアのような個々人の努力によって守られていること、その土台には地域の理解や想いがあることを知ってもらうのが狙いです。地元を過去・現在・未来の視点で知ってもらい、奈良県の子どもたちに、次の時代へ平城宮跡を伝えていく役割を担ってもらいたいのは勿論のこと、身近な市町村にある史跡や文化財にも興味や関心をもち、地域の一員としてそれらを引き継ぐことを自覚する助けとなれば幸いです。

今回の改訂によって、学校団体による平城宮跡のさらなる利用が期待されます。文化遺産に恵まれた奈良県の児童が学ぶ教材として、また、文化財や史跡の未来の担い手を育てる教材として、平城宮跡が今後より一層活用されることを願ってやみません。

（企画調整部　廣瀬 智子）

改訂版『奈良県のくらし』

奈文研の活動を紹介した掲載内容

発掘調査の概要

藤原京左京八条三坊の調査（飛鳥藤原第202次）

前号では、発掘調査前半の状況を中世の遺構を中心に報告しました。その後、2020年３月30日まで調査をおこない、新たな知見を得ました。

調査区中央では、南東から北西に流れる自然流路を検出しました。第27-７次調査で確認した大溝の続きとみられます。当初、１本の流路と考えていましたが、調査を進めるうちに２本の流路が重複することがわかってきました。古い流路は弥生時代後期の土器を埋土に含み、幅６ｍ以上、深さ0.4ｍありました。いっぽう新しい流路は、幅3.0ｍ、深さ0.6ｍあります。この流路を藤原京期に埋め立てたのち、その周囲は大規模な整地をおこなっています。

ほかにも古代の遺構として、調査区南部で柱穴列２条を検出しました。柱穴列は建物や塀の一部を構成する可能性があります。しかし、柱穴列の南や東は平安時代以降の洪水により大きく削平されており、柱穴の続きは検出できませんでした。

また、弥生時代の遺構として、自然流路のほかに井戸や土坑、溝を検出しました。特に井戸は素掘りで、径1.1ｍ、深さ0.8ｍあります。井戸の埋土最下層、中層、最上層からは弥生時代後期の完形の長頸壺が１点ずつ出土しました。これらは井戸を埋める際に意図的に置かれた可能性があります。

このように、本調査では弥生時代から中世までの遺構を確認しました。古代以前に調査区内を流れていた自然流路の存在は、現在は調査区より約10ｍ南で北西から西へと向きを変える中の川の旧河道を考える上で参考になります。流路は藤原京期以降埋め立てられ、その後何度か洪水を経験しつつも、この地が中世まで活発に利用されていた状況があきらかになりました。　　（都城発掘調査部　石田 由紀子）

大官大寺南方の調査（飛鳥藤原第203次）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、大官大寺と山田道にはさまれた地域の実態解明を目的として、継続的な調査をおこなっています。昨年度は２月から３月にかけて、大官大寺南限から南へ約25ｍの地点で試掘調査をおこないました。調査面積は120㎡です。また、試掘調査地南方では約10,000㎡を対象に地中レーダー探査をおこないました。

調査の結果、７世紀後半以降とみられる整地土層をはさんで、上層では南北溝２条、下層では７世紀前半の東西溝１条とそれに沿う柱穴列等を確認しました。

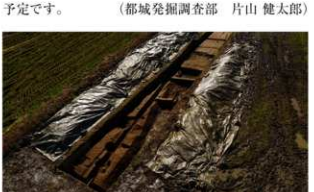
上層の南北溝２条は、藤原京東四坊坊間路の東西両側溝の可能性がありますが、溝の大きさや埋土の堆積状況がそれぞれ異なっており、さらなる検討が必要です。

一方、下層の東西溝は調査区内では南肩を確認したのみですが、幅2.2ｍ以上、深さ約0.5ｍで、断面は逆台形です。この溝からは土師器、須恵器等がまとまって出土しており、概ね７世紀前半に位置づけられます。また、ウリ種実等の植物遺存体、燃えさし等が出土しています。これらは東西溝の南肩付近から集中的に出土することから、南方から投棄された生活廃棄物と考えられます。

今回、大官大寺南方に藤原京の条坊が施工されていたかどうかの確証は得られませんでした。しかし、７世紀後半以降の複数回の整地土層を確認することができたことにくわえ、７世紀前半の遺構の存在があきらかになったことは、当地域の土地利用の歴史を考える上で大きな成果といえます。

今後もさらに南の地域で試掘調査、地中レーダー探査を実施し、７世紀前半の遺跡の広がりや、それ以降の整地の年代や条坊施工の有無を解明していく予定です。　　（都城発掘調査部　片山 健太郎）

調査区全景（南東から）



下層東西溝と柱穴列（北東から）

法華寺庭園の調査（平城第618次）

法華寺庭園は、法華寺客殿にともなう庭園で、客殿玄関へ向かう「前庭」、客殿の書院に面する「内庭」、客殿の上の御方の南西に展開する「主庭」からなります。客殿が当地に移築された寛文13年（1673）にほど近い、高慶尼（近衛信尋息女）の住職在任期（17世紀半ば～18世紀初め頃）、すなわち江戸時代前期に造られた庭園であると評価されてきました。

本庭園は、1954年には奈良県の指定文化財（名勝）に、2001年には国名勝に指定され、保護が図られてきましたが、マツの枯死やカキツバタの衰弱、池護岸の崩れ等、日常の維持管理では対応しきれない問題が多く生じています。

そこで2019年に「名勝法華寺庭園保存整備委員会」が組織され、保存整備事業を開始することとなりました。初年度には、池護岸の崩壊要因の把握および構築技法の解明を目的に、池南半部の岸に３ヵ所のトレンチを設定し、発掘調査をおこないました。

現状の池の石積護岸は、胴木の上に自然石を３～４段ほど積み重ねて構築されていました。裏込として下層に粗砂、上層に粘質土ないし砂質土を用いていますが、この裏込の上層と下層の境界に大きな空隙が生じていました。池の水位が上下することにより浸食が進んだためとみられます。これが原因となって石積護岸が一部崩落していたことがわかりました。本庭園を適切に保存するために早急な対応の必要があります。

また、盛土の最下層から江戸時代前半と考えられる瓦が出土した１トレンチの調査成果から、本庭園の当初作庭年代が江戸時代前半である可能性が高いことがわかりました。これは、従前より、寛文13年（1673）頃と目されてきた作庭年代を考古学的に支持するもので、本庭園の学術的価値が一層高まったといえるでしょう。

以上、本庭園の今後の保存活用に資する重要な成果を得ることができました。

（都城発掘調査部　大澤 正吾）

平城第618次調査区位置図　１：1000

２トレンチ完掘状況（北から）

１トレンチ完掘状況（東から）

３トレンチ完掘状況（北から）

平城京で出土した鉄斧

ここに並んでいるのは、これまでの平城京の発掘調査で出土した奈良時代から平安時代前期頃の鉄斧です。これらは木材を加工する際に用いられた道具であると考えられます。

斧は、柄の付き方で縦斧と横斧に分けられます。刃が柄と平行すると縦斧、刃と柄が直交すると横斧になります。刃は、上部両辺を折り曲げた袋状になっており、この袋部分に柄を差し込んで利用します。柄は木で作られますが、一緒に見つかることはあまりありません。そのため、柄が残存していない状態では、形状から縦斧か横斧かを区別することが難しくなります。右端の鉄斧には、幸いにも柄の一部が残っていたため、横斧として用いられたことがわかりました。

平城京から出土した柱等の建築部材や、木屑などと照らしあわせることで、古代の人々が鉄斧を用いて、どのようなものを加工していたのか、調査を進めていきたいと思います。　（都城発掘調査部　浦 蓉子）

奈良時代の横斧（復元品）

写真は原寸大（復元品を除く）

日中学術交流に参加して

2019年10月８日から11月15日まで、奈文研と中国社会科学院との間に交わされた友好共同研究議定書にもとづき中国に滞在しました。この事業は昨年度に再開したもので、今回が２年目となります。

滞在中は、北京の社会科学院考古研究所を拠点に、揚州、洛陽、西安にそれぞれ１週間から10日程度滞在し、自身の専門である瓦の調査を軸に発掘調査現場や遺跡を訪れました。今回の滞在では、残念ながら中国の発掘調査に参加することはできませんでしたが、藤原京や平城京と同時代の唐代の瓦をじっくりと観察することができました。中国では、日本の瓦のように瓦当や製作技法から、細かな年代を知ることは容易ではありません。揚州城や隋唐洛陽城、唐長安城から出土した膨大な量の瓦を目の前にして、中国の瓦研究の難しさを実感しました。同時に、各地域の技法の特徴や地域性などを把握することができ、今後の研究につながる足がかりを得ることもできました。

また、11月７日には研究所主催の学術講座にて、藤原宮の瓦について発表する機会をいただきました。講座には所員をはじめ、北京大学の学生等も聴講に訪れ、たくさんの質問や貴重なコメントをいただきました。講座の後の交流会で、達成感と安堵感とともに食べた北京ダックの味は忘れられません。

私は中国語がほとんど話せないので、滞在中は自身の考えをうまく伝えることができず、そんな自分にもどかしさを感じることもありました。しかしながら、研究所の皆さんは私の意思をくみ取り、できる限りの研究環境を整えてくださいました。この場を借りてお礼申し上げるとともに、今後も学術交流が継続し、発展するよう微力ながら尽力していきたいと思います。　（都城発掘調査部　石田 由紀子）

揚州での瓦調査の様子

中央アジア旧石器調査成果の刊行

日本も含めた現在の世界の考古学界では、新人のユーラシア拡散の実態解明が最大のテーマとなっています。奈良文化財研究所はこのような学術的な背景を鑑みて、2009年から2012年の４年間にカザフスタン、タジキスタン、ウズベキスタン、キルギスの中央アジア４ヵ国で、旧石器時代の遺跡踏査や資料調査を実施しました。

その結果、ユーラシア大陸の中央部をバミール高原やザラフシャン山脈、天山山脈の山麓に沿いながら西から東へ先史人類が拡散していったかつての道すじが見えてきました。パレオ・シルクロードの発見というべきでしょう。2015年以降の最近５年間になってようやく、欧米露の一流の研究所や大学が中央アジアで野外調査を展開していますが、彼らに先んじて多大な成果を上げたのです。

そこで2019年から奈良文化財研究所研究報告の枠組みで、ユーラシア考古学研究資料として刊行し、その成果を一般に広く公開することにしました。2019年に『カザフスタン後期旧石器文化の研究』を、2020年に『タジキスタン中期旧石器文化の研究』を刊行しました。しばらくは成果報告を続けていくことになりますが、すべての成果を刊行し終えたその先には、世界に向かってユーラシア先史学を刷新する新たな地平を提示することになるでしょう。

奈文研は、アジア各国で多年にわたり、文化遺産保護のための国際協力事業を通じて深い信頼関係を醸成してきました。その信頼関係を背景として初めて可能になった革新的な調査研究成果の刊行事業が、ようやく始まったのです。

（都城発掘調査部　国武 貞克・文化庁　芝 康次郎）

カザフ国立大学での資料調査

国立文化財機構文化財防災ネットワーク推進事業による川崎市市民ミュージアムレスキュー支援

奈良文化財研究所が所属する国立文化財機構では東日本大震災における文化財レスキュー事業を基盤として、今後発生が予想される大規模災害に備え、全国的なネットワークの構築を目的に「文化財防災ネットワーク推進事業」を展開しております。

昨年10月、日本列島に大きな爪痕を残した台風19号では各地で大きな被害が発生し、特に大規模河川の流域では各所で氾濫が多発しました。その中で神奈川県川崎市では市民ミュージアムの地下収蔵庫が水没し、収蔵されていた多数の文化財が被害を受ける事態が発生してしまいました。

この水没文化財を救出し、応急処置を実施するために川崎市より依頼を受けた防災ネットワークが機構内各施設（国立博物館・文化財研究所）に呼びかけ、本年１月から３月にかけてレスキュー作業に従事しました。奈文研からも延べ13名の職員が川崎入りし、様々な文化財の救出・応急処置に参加してまいりました。

川崎市市民ミュージアムは近代美術品からマンガ・映画・写真や民俗資料、考古資料など、扱う文化財が非常に多岐にわたり、被災した文化財もそれぞれについて救出方法や応急処置の手順に異なったノウハウが必要となります。参加した研究員や職員は、それぞれの専門分野とは全く異なる分野の文化財のレスキュー作業をおこないました。とまどいはあったものの、幅広い文化財のレスキュー作業に従事できたことの意味は大変大きく、今後発生が予想される災害に備える意味においても貴重な経験となりました。（企画調整部　中村 一郎）

救出・消毒した美術作品の仮保管作業

『奈文研論叢』の創刊

奈文研では、さる2020年３月19日に、新たな論文集『奈文研論叢』の第１号を刊行しました。

奈文研における研究論文の発表の場には、『奈良文化財研究所紀要』、『研究論集』、『文化財論叢』がありましたが、いずれも様々な制約をもっていました。このため、多くの所員から、テーマや分量にとらわれず、個人研究の成果を自由に発表できる場を求める声が寄せられていました。その声に応え、『奈文研論叢』は創刊されました。

学術的な水準を保つために査読制をとり、海外への情報発信の一助として英文要旨を付しました。

本簡から採った字と東院地区出土の唐草文須恵器杯蓋をデザインした字体・図案を用いた表紙は、新しい論文集にふさわしいものになりました。

現在、第２号について今年度内に刊行をすべく、準備に入りました。『奈文研論叢』を末永くよろしくお願い申し上げます。（企画調整部　加藤 真二）

※『奈文研論叢』は、平城宮跡資料館、飛鳥資料館、いざない館、六一書房にて販売いたしております。（定価 税込￥1,100）

「奈文研論叢」第１号表紙

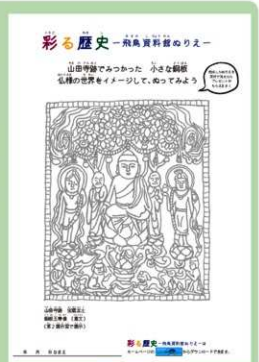
おうちで飛鳥資料館

飛鳥資料館では、手軽に展示を楽しめる様々なコンテンツを用意しています。その一つが子ども向けのパンフレット「飛鳥の歴史をほりおこそう」です。飛鳥資料館の展示品のみどころや、展示資料にまつわるクイズを通して、飛鳥の歴史について学びを深めることができます。子ども向けではありますが、飛鳥時代の年表や展示品紹介等も掲載しており、飛鳥の歴史を基礎から学びたいという大人の方にもおすすめです。

また、展示品の豊かな表現を楽しめる「彩る歴史―飛鳥資料館ぬりえ―」も子どもから大人まで幅広い人気を集めています。山田寺跡から出土した銅板五尊像を下絵にしたぬりえは、細かく図像が表現されていて、小さな銅板にあらわされた仏像の世界に没入できるだけでなく、古代の鋳造技術の高さを実感できます。ぬりえをしてから実物をみると、その繊細な技術に一層驚かされます。

これらのコンテンツは、館内での無料配布のほか、飛鳥資料館ホームページの「おうちであすかしりょうかん」からダウンロードもできます。ぜひ気軽に飛鳥の歴史をお楽しみください。（飛鳥資料館　西田 紀子）

ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/asuka/
お問合せ：☎0744-54-3561



飛鳥資料館ぬりえ
山田寺跡出土銅板五尊像

ご来館のみなさまへ
奈良文化財研究所公開施設再開にともなうお願い

公開施設（平城宮跡資料館、飛鳥資料館、藤原宮跡資料室）は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、２月27日より臨時休館を継続してまいりましたが、６月２日（火）より再開しております。

再開するにあたり、風邪の症状がある方、体調がすぐれない方、過去２週間以内に発熱や風邪の症状で受診や服薬等をされた方、過去２週間以内に感染拡大地域や国へ渡航歴がある方につきましてはご入館をお控えいただきますようお願いいたします。ご来館の際には、感染症予防の観点から、マスクの着用、手洗い等のご協力をお願いいたします。

また、入館時には検温を実施しております。ご観覧中は、来館者同士の間隔を２ｍ以上あけ、展示室内での会話はご遠慮いただくとともに、展示品や展示ケース、壁には触れないようお願いいたします。

なお、当研究所で新型コロナウイルスの感染者が確認された場合は、当研究所ウェブサイトにその情報を掲出いたします。

お客様ご自身におかれましては、当研究所への来館日時を記録願います。当研究所ウェブサイトを適宜ご確認いただき、発生日時にお客様がご来館されていた場合は、ご自宅の都道府県・相談窓口にご連絡ください。新型コロナウイルス感染症拡大防止策を徹底し、皆様のご来館をお待ちしております。　（企画調整部　藤田 友香里）

ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/　お問合せ：☎0742-30-6753（連携推進課）

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　https://www.nabunken.go.jp
Ｅメール　koho_nabunken@nich.go.jp
発行年月　2020年6月